

## 故 佐藤 浩の研究活動を支え、見守って下さった皆様

昨年11月に故人を見送ってから、既に9箇月あまりの歳月が流れました。この間に、皆様から私ども遺族に寄せられた様々な御厚情に、改めて深く感謝を申し上げます。

佐藤浩は晩年、斉藤博之助氏、中村宏氏らとの実験研究の傍らで、執筆活動を行っておりました。通算250号超の発行となった“ながれだより”をはじめとした論述です。特に最晩年の日々は、発表済の原稿に手を入れたり、新たに書き下ろしたりといった著述活動に、労力を傾注しておりました。

時折訪ねると、バインダーやUSBメモリの大量入手について話題にもなったりして、「人生の集大成の作業なのだろう、手伝うことはないか？」などとも話しておりましたが、具体的な依頼は本人の口からは、それ以上は出ませんでした。自分にはもう少し時間があり、最後まで仕上げるつもりであったのでしょう。こちらも、残された時間に限りがあることを強調することは控えて、ただ見守っておりました。

肺炎による一週間の入院の末の昨年11月25日の死去は、本人にとっては予想外の、不慮のものであったと思います。臨終の際に左目から流れ出た涙は、妻 矩子への永年の感謝とともに、やり残したことへの悔しさの現れであったのかも知れません。

生前は決して手を触れさせてもらえなかった机上の書類や、PC内（USBメモリ内）の膨大な文書データに向き合い、晩年の作業が“乱れ学”を中心とした体系化の作業であったことを、恥ずかしながら初めて知りました。整理を始めながら読み進めて、その考察の多岐にわたることを知り、故人の“大きさ”に改めて触れた様な気がします。

本人は生き延びて、今春、皆様に“乱れ学”をお届けする計画であった様です。その予定からは、大幅に遅れてしまいました。「もたもたして、そんなにかかるなら、やらなくていい！」と、筆者に一喝されそうですが、内容の豊富さに対する、ひとえに私自身の力量不足ゆえです。ひたすら恥じ入るとともに、皆様には、何卒御容赦をいただければと存じます。

今回の編集が故人の遺志をどれだけ体现出来ているか、甚だ心許ない点もあります。著者が予定したであろう頁数の1.5倍もの分量に達し、内容の重複もだいぶありますが、その反面で、重要と考えられる原稿は漏らさず集録したつもりでおります。重複箇所は、強調の意味と解釈していただければ幸いです。

なお、本書は旧佐藤研の方々を中心に数十名の皆様にお送りしております。また、御覧いただいた方々には、ファイルなどのコピーや転載、配布は御自由にお願ひ致します。それが故人の遺志にかなうものと、確信しております。但し、巻末資料の内で学会誌などに発表された論文のみは、著作権などの問題を生じない様に、取り扱いに御配慮下さい。

少しでも多くの方々に読んでいただければ、幸甚に存じます。

本編集に当たっては、高木 正平 様（首都大学東京）、福西 祐 様（東北大学）、跡部 隆 様（JAXA）、大田黒 俊夫 様（日立化成）、大成 博文 様（ナノプラネット研究所 元徳山高専）、斎藤 博之助 様（流れ研究集団）、中村 宏 様（流れ研究集団）の御指導並びに御助力を賜りました。

深く御礼を申し上げます。

佐藤浩の遠慮のない率直な物言いを思い浮かべながら、御覧いただければと存じます。

2014年8月

佐藤 潔（故 佐藤 浩 愚息）